



「どろんこの歌」

仲野 猛編著

知的障害児の教育が日本にはいつからあまり間がないし、この子らの内面がよくはわかっていないので、方法の上での「決め手」といったようなものもまだないといつてよい。

ただ、先生と子どもとのいい取組みの中でなら、何とか子どもたちの内面がわかってくるということはある。

いい取組みとは、「やんちゃのやさしさ」ということばがあるように、外面だけで判断してしまうのではなくて、内面に我々の知らない何か秘められているのではなかろうか、外面は何も動いていないように見えるが、中では何か育ちつつあるのではなかろうか、そういう目で子どもたちを見ると、子どもたちも、先生のその目に分の厚いあたたかな心を見て、これなら安心と、閉じられていた心の扉を開いて内面を見せはじめる。

手は手でないと洗えないということばがあるが、心は心でないと見られないのである。

子どもたちが先生に心を開かない限り教育も療育も成立たない。

仲野先生の心を見た子どもたちは安心して内面を流露しはじめ、仲野先生はそれを「粘土」にのせた。粘土は絵、水、木、布、紙、紐などと共に内面を引出し、のせるすぐれた媒体である。

太古の人たちが持っていたであろうかと思われるような純で素直で底抜けに明るい大らかな心が泉の如く自然に湧き出ている粘土や絵にのった詩を、われわれはこの本に見る。

これは、教育や療法が願うべきすばらしい姿の一つである。

紙も道具も機械も否定はしないが、やはり教育や療育の基盤に置くべき考えは、心は心でなければ見られないということであろう。

(A5, 170 頁, 合同出版 ¥ 1,200, 1981)

(一麦寮 田村 一二)